小林秀雄講演集

常識について

筑摩叢書 62

筑摩叢書　62

小林秀雄講演集

常識について

筑摩書房

小林秀雄（こばやし　ひでお）

1902　東京に生れる
1928　東京大学仏文科卒業
著書　――「小林秀雄全集」（全八巻）「考へるヒント」

常識について　――小林秀雄講演集――　筑摩叢書 62

昭和41年7月20日　初版第一刷発行

¥ 450

著　者　小林秀雄
発行者　竹之内静雄
発行所　株式会社 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町2の8
電話　東京(291) 7651番（代表）
振替　東京 4123番

© 1966

暁印刷・美行製本

目次

文學と自分……三
歴史と文學……二五
表現について……五七
私の人生觀……八三
政治と文學……一四九
ドストエフスキイ七十五年祭
　に於ける講演……一八一
ゴッホ展に際しての講演……二三三
常識について……二三九
喋ることと書くこと……二六五
解說　江藤　淳……二九三

常識について

小林秀雄講演集

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

文學と自分

今度、文藝銃後運動の講演旅行に參加させて戴いたが、僕は平素考へてゐる處と違つたお話をしようとは少しも考へてをりませぬ。又、そんな事が出來るとも思ひませぬ。たゞ、平生文學に就いて考へてゐるところをお話しして、それが多少でも皆さんの御參考になれば、と思つてゐます。

今日は非常時であるから、いろいろ非常時政策といふものが行はれるわけですが、政策といふものと思想といふものは、自ら異るのであつて、非常時の政策はなければならぬだらうが、非常時の思想といふ樣なものがある筈はないと考へます。

成る程、政治家が思想とは卽ち政策だと言つても一應尤もな事である。何故かと言ふと、政治家にとつて、思想の價値は、何で定まるかと言へば、それを實生活の上に實施して、成功するかしないかといふところで定まる他はないからであります。さういふ政治の性格は、今日の樣な非常時には、特に目立つて來る。例へば、戰爭といふ事でも、これは非常に大きな政策であるが、

決して巧い政策とは言へない。併し、この拙い政策も、將來實際の平和を實現する爲に行はねばならぬとあれば、行はねばならぬ。行つて實際に平和といふ目的を貫く事に成功するならば、拙劣な政策も決して拙劣ではないといふ事になります。だから、實際の目的を達するか達しないかを考へずに、手段の善惡巧拙を云々する事はナンセンスだ、といふ事になるわけで、目的の爲には手段を選ばぬといふ事は、常に必要に迫られた場合、政治の掟であると言へるのであります。

ところが、文學者には、思想といふものについて、さういふ風な考へ方は、どうしても出來ない。政治家は極端に言へば、將來の實際の效果を狙つて誤らぬとすれば、思ひ付きの思想であらうが、借りものの思想であらうがこれを行ふのに遲疑してはならぬとさへ言へるであらうが、文學者は、さういふわけには行かぬ。自分の身に付いた思想は、これを身に付けるにも時日を要し、これから脫却するにも時日を要する。借りものの思想を必要に應じ抱いて、どうあがかうが、物の役には立たぬ。

文學者は、思想を行ふ人ではなく、思想を語る人だ。今日の樣に、實行の世の中になると、文學者などは、口說の徒ではないか、といふ人が增える。そんな事を言ふ人が增えても減つても、文學者は昔から口說の徒たる事にいさゝかも變りはないので、口說の徒で充分であると信ずる者を動かす事は出來ませぬ。文學者にとつて、思想の價値は、それを巧く書くか拙く書くかといふところで定まつて了ひます。どう書くのが巧妙であり、どう書くのが拙劣であるか、それだけ

で、もう底の知れぬ大問題であつて、この點で失敗して了へば、辯解の餘地など全然ないのであります。譬へて言へば、大工が家を建てる樣なもので、家を拙く建てて了へば、人間を住まはせるといふ目的などナンセンスである。建て方は下手だが結構雨露は凌げるではないかといふ樣な辯解は意味を成さぬ。それと同じ事です。

さういふ次第で、文學は飽くまでも平和な仕事だ、將來の平和の爲の戰でさへない、仕事そのものが平和な營みなのである。ペンの戰とか思想戰とか言ふが、無論、これは物の譬へであつて、戰は劍で行ふぐらゐは三歲の童兒も知つてゐる。どんな大文學も蟻一疋踏潰す力は持つてゐない、どんな大思想も、たつた一人の人間の空腹を滿たすに足りない。この簡單な物の道理が、徹底して合點され、本當に心に堪へたならば、言葉の力に賴つて、實際の物の動きを、どうかうしようといふ、文學者の曖昧な感傷的な自惚れは消えてなくなるだらう、僕はさう信じてゐます。

事變の始つた當時、戰爭に處する文學者の覺悟如何といふハガキ回答を雜誌社から求められた事があつた。馬鹿馬鹿しかつたから答へなかつたが、こんな質問が雜誌から出て、文學者が頭をひねり、いろいろ尤もらしい考へを述べたといふ事は、いかにも不見識なていたらくで、平素、文學といふものを突き詰めて考へ、覺悟を決めてゐないから、いざとなるとあわてるのだ、とその時痛感したのを今でもよく覺えてをります。今日となつては、もう覺悟の定まらぬ樣な文學者はをらぬ事を信じてゐるが、その點、誤解のない樣に願ひたいが、當時の僕の感じから、追ひ追

ひ自分の考へを述べたいと思ふ。

文學者は、戰にどう處するかと言ふが、一體戰ふのは誰なのか、自分が戰ふのではないか。文學者といふ樣な抽象人が誰と戰ふわけではありますまい。では、何故さういふ質問があつた場合に、自分は出征する時どんな顏をするか、その顏を思ひ浮べて物を考へないか。常に己れの身に照らして物を考へようと努めないから、考へが空想に走る。考へが空想に走つてはならぬ、とは誰も言ふ。具體的に物は考へなければならぬと言ふ。口には言ふが、實際にさういふ事の出來てゐる人間は實に少いものです。文學者は戰爭にどう處するか、さういふ問題は具體的に考へてみなくてはならぬ、それには先づ嘗ての歐洲大戰當時、外國の文學者はどう大戰に處したかを具體的に考察しなければならぬ。これでは何が具體的だかわからぬ。冗談と取られては困ります。この類ひ、具體的といふ言葉を提げて、空想の國に遊ぶ類ひは、意外に多いものであります。

戰が始つた以上、何時銃を取らねばならぬかわからぬ、その時が來たら自分は喜んで祖國の爲に銃を取るだらう、而も文學は飽く迄も平和の仕事ならば、文學者として銃を取るとは無意味な事である。戰ふのは兵隊の身分として戰ふのだ。銃を取る時が來たらさつさと文學など廢業してしまへばよいではないか。簡單明瞭な物の道理である。現代の知識人には、簡單明瞭な物の道理を侮る風があるが、簡單明瞭な物の道理といふものが、實は本當に恐いものなので、複雜精緻な理論の嚴めしさなど見掛け倒しなのが普通であります。人間だつてさうだ。單純率直な人間が恐

いのだ。尤も、それには、所謂複雜な心の持ち主といふ樣な近代文學者の愛好する人間タイプの退屈さ無力さが、身に沁みて解つて來なければ駄目なのでありますが。

さて、一文學者としては、飽くまでも文學は平和の仕事である事を信じてゐる。一方、時到れば喜んで一兵卒として戰ふ。これが僕等の置かれてゐる現實の狀態であります。何を思ひ患ふ事があるか。戰に處する文學者としての覺悟などといふ質問自體が意味を成さぬ。さういふ質問が出るといふ事が、そもそも物を突き詰めて普段考へてをらぬ證據だと思ひます。僕の言ふ樣な考へ方は、矛盾してゐるではないかと言ふかも知れないが、世の中を矛盾なく渡らうといふ考への方が餘程お目出度い考へではありませんか。そしてお目出度い事だと、本當に腹に這入れば、矛盾も決して矛盾ではないのであります。實は、これがお話の眼目なのであるが、すこしお話を急ぎ過ぎた樣ですから、前に戻りませう。

文學者は、思想を行ふ人ではなく、思想を語る人だと前に申しました。藝術は表現である、とは誰も言ふ事で、僕も誰も言ふ以上の事をお話し出來るとは思つてをりませぬが、たゞ、文學は表現であると傍人が傍觀してゐるのと、自分の目的も手段も一切が言葉の表現のうちにあると信じて仕事に努める文學者の覺悟とは、自ら異ると思ふので、こちらの覺悟の側からお話を進めたいと考へます。僕は學校にゐる關係で、文學をやる學生諸君には、常に接してゐるわけですが、近頃は文學が普及した結果、文學に關する學生諸君の知識は、驚くほど豐富になつて來てゐると

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

思ふ。併し、それが爲に文學者の覺悟といふものが摑み易くなつて來てゐるわけではない、寧ろ難かしくなつて來てゐる。何故かといふと、元來、知識といふものは、特に文學的知識といふものは机の前に默つて坐つてゐる我慢さへあれば、增やさうと思へばいくらでも增えるし、精しくしようとすれば、いくらでも細かく複雜なものになるもので、さういふ知識の性質は、人間の頭をどうしても空想的にする傾向があります。一方、覺悟といふものは、文學者の覺悟に限らず增やさうとして增えるものでもないし、精しくしようとして精しくなるものでもない、覺悟するかしないか二つに一つといふ簡明な切實なものである。知識のうちには、文明人がゐるが、覺悟の裡には、いくら文明が進んでも、依然として原始人が棲んでゐる。知識で空想化した頭腦には、なかなか摑み難いものなのであります。

さういふ事を、僕は、文學をやる學生諸君を見てゐて、强く感じてゐる次第ですが、藝術は表現だといふ考へにしても、これを知識の側から考へれば、この片言から、美學大系の二つ三つ忽ち膨れ上がるといふもので、學生諸君も、文學表現の時代性とか社會性とかいろいろ精しく考へるのだが、ことを覺悟の側から見れば、自分は果してこの片言を徹底して信ずるのか信じないのかといふ簡明切實な問題に歸して了ふ。そしてそれは一體どういふ問題なのだ、といふ事にはひどく無關心で鈍感になつてゐます。

自分は書く事は下手で、考へてゐる事の十分一も言へてゐない、それを考へて吳れず、自分と

いふ人間を判斷して貰つては困る、文章は淺薄かも知れないが、實はなかなか深刻な事を考へてゐるのだから。さういふ事を言ひます。自分の鼻は見た處確かに胡坐をかいてゐるが、實はもつと上等の鼻を何處かにちやんと持つてゐるのだ、そんな事を言つたらをかしいでせう。をかしいから鼻に關しては、見られた儘で諦めてゐるが、文章だと諦めない。文章が低級に見えるだけではないかと頑固に主張する。もつとましな自分自身といふものが、姿を見せないが、恰も雲の中に龍が隱れてゐる樣なあんばいに頭の中に隱れてゐると信じ込んでゐる。これは迷信でありまして、本當の彼自身とは淺薄な文章以上でも以下でもない、頑固に主張するその頑固さも明らかに彼の表現だとすれば、淺薄さプラス頑固さが卽ち彼自身であつて、その他に彼自身などといふものはありませぬ。人間は誰でも見えた通りのものであります。孔子樣も「人焉ゾ廋サン哉」と繰り返しおつしやつた。

文學に志す人は、誰でも頭のなかに龍を一匹づつ持つて始めるものですが、文學者としての覺悟が定まるとは、この龍を完全に殺して了つたといふ自覺に他なるまいと考へます。僕の貧弱な經驗から考へても、この仕事は口で言ふ程たやすいものではなく、どうすれば殺せるかといふ解り易い方法があるわけでもない。これは單に思索の上の工夫ではなく、意志や感情や感覺による工夫でもあるからです。殺さうと思つて却つて相手を肥らせるといふ樣な事にもなりませうし、忘れてゐるうちに相手が死んでゐるといふ樣なうまい事にならぬとも限らぬし、まあ要するに相

手は魔性であると思へば間違ひない。

文章といふものは、先づ形のない或る考へがあり、それを寫す、上手にせよ、下手にせよ、ともかく、それを文字に現すものだ、さういふ考へから逃れるのは、なかなか難かしいものです、そのくらゐな事は誰でも考へてゐる、ただ文士といふのは口が達者なだけだ、といふのが世人普通の考へ方であります。併し文學者が文章といふものを大切にするといふ意味は、考へる事と書く事との間に何の區別もないと信ずる、さういふ意味なのであります。拙く書くとは卽ち拙く考へる事である。拙く書けてはじめて拙く考へてゐた事がはつきりすると言つただけでは足らぬ。書かなければ何も解らぬから書くのである。文學は創造であると言はれますが、それは解らぬから書くといふ意味である。豫め解つてゐたら創り出すといふ事は意味をなさぬではないか。文學者だけに限りません。藝術家と言はれる者は、皆、作品を作るといふ行爲によつて、己れを知るのであつて、自己反省などといふ一種の空想によつて自己を知るのではない。例へば、ミケランジェロは、大理石の塊りに向つて、鑿を振ふ、大理石の破片が飛び散るに從つて、自分が何を考へ、何を感じてゐるかが明らかになる、遂にダヴィッドが石の中から現れ、ダヴィッドとは自分だと合點するに至る。出來上つたダヴィッドの像は彼に樣々な事を敎へる、彼の心に樣々な新しい疑問を起させる、彼は解らぬまゝに、又、鑿を提げて新しい大理石の塊りに向ふ。恐らくこれが藝術家の仕事といふものの實情なのであります。彼自身の觀念とか思想とかいふものがあつ

て、それを石に託し表現したといふ樣なわけのものではない。批評家は、或作品の源にある觀念(イデ)だとかといふものを好んで口にするが、たゞそんな事を言つてみるに過ぎない。影を追ふ遊戯であります。尤も、影を追ふ遊戯とはつきり知つて樂しんでをれば無害な樂しみではありますが。

以上、表現といふのを徹底して考へたらどうなるかといふ事に就いて早口にお話ししたわけだが、序に早口に付け加へて置きます。文學者は形のある言葉だけを信じて、形のない考へといふ樣なものを信じませぬ。常に形あるものの間の勝負が一切なのである。自分とは形ある作品の事であつて、頭で考へた自我といふ樣な餘計なものは要らぬ。それなら自然に對しても人生に對しても、その流儀で考へて然る可きである。自然も人生も眼に見え耳に聞える、まさにその通りの姿以外のものではない。あるが儘の姿こそ自然の眞髓であり、人生の眞髓である。あるが儘の形の裏に眼に見えぬ眞を考へる要もなし、又、あるが儘の形を構成してゐる樣々な要素の方が、あるがまゝの形より一層眞實であるといふ樣な主張も餘計なお世話である。德川家康が、かう人に敎へたさうです、「眞らしき嘘はつくとも、嘘らしき眞を語るべからず」かういふ言葉を、單なる處世訓と解したら、詰らぬ言葉に過ぎませんが、僕は、この炯眼なリアリストの言葉には、もつと深い人生の洞察が含まれてゐる樣に思ひます。人生には嘘とか眞とかと考へられたものがあるわけではない、そんなものは全然ない、嘘らしい言ひ方と眞らしい言ひ方とがあるだけである。嘘らしく現れる眞とは卽ち嘘であり、眞らしく表現された嘘とは卽ち眞である。さういふ徹

底した意味が隱されてゐるのだ、と僕は考へます。そこまで徹底してゐなければ、神君などと言はれてもつまらぬ男です。

さて、別の方から表現といふ問題を取り上げてみませう。前に口說の徒といふ事を申しましたが、口說の徒で十分であると信ずるといふのも亦文學者にとつて書くといふ事が卽ち切實な實行だからであります。世人は、言葉では解らぬ、實際の事にぶつかつて自得するのだ、と言ひますが、文學者にとつて、文章とはぶつかる實際の事なのであります。さう申しても、言葉は口先の事だ、文學は紙の上の事だ、といふ感じが、どうしても諸君にはあるだらうと思ふが、それは、言葉といふものに對する心構へについて、文學者は餘程世人と異つてゐるといふ處から來るのであります。異つた心構へで、言葉に對してゐるといふより、もつと深く言葉を愛してゐる、と言つた方がよいかも知れぬ、そこから來る。

例へば、煙草を持つて來い、といふ言葉がある。煙草を持つて來てくれれば、もうその言葉は用がなくなる。又、煙草を持つて來させるには、必ずしも、煙草を持つて來い、といふ言葉さへ要らぬかも知れない、顎を使つても事が足りる、といふ場合もあつて、用が足りれば、消えて了ふ言葉といふものが世間では一番多い。それから、もう一つは、理解に訴へる言葉、例へば、二に二を足せば四になる、といふ種類の言葉、これを聞いて、まさしく二に二を足せば、四になると理解して了へば、その言葉は消えて了ふ。文學者の言葉は、そのどちらの種類でもありませ

ぬ。一つの詩を讀んで、煙草を持つて來る人もなければ、よろしい君の理窟は解つたといふ人もない。詩は行動のなかにも理解のなかにも消え去らぬ。最初書かれたそのまゝの姿を何時までも保存してをります。保存してゐる許りではなく、讀む人により日に新な味ひを生みます。恰も、自然が人間に、どんな行動の爲に利用されようと、どんな形式の下に理解されようと、あるが儘の姿を保存し、例へば畫家の眼に日に新な美しさを提供してゐる樣なものだ。若し文學者が、言葉といふものを、さういふ風なものと信じ、さういふ風なものと扱つてゐるのなら、文學者は、言葉を何かの符牒や記號としてではなく、どこまでも、色彩もあり目方もある自然物の樣に扱つてゐるものだと言へませう。彫刻家の扱ふ大理石の樣な物質ではないとしても、決して色も形もない觀念ではない、彫刻家が、鑿の先に石の抵抗をしかと感じてゐる樣に、文學者はペン先に、人間の考へ次第ではどう變へようもない言葉といふものの目方を感じてゐるのであります。

海とか空とかいふ言葉は、悟性の約束による記號ではない、海や空といふ實物に繫り、海の匂ひも空の色も映してゐる。善とか惡とかといふ意味だけで出來てゐる樣な言葉にしても、文學者は、長い人間の歷史の脂や汗に塗れてゐるさういふ言葉の形をしかと感じてゐるのであつて、歷史の脂や汗を拭ひ去つて了つたら言葉はもはや言葉ではなくなる、それはたゞ推理の具と化するのであります。かう考へて來れば、傳統のない處に文學はないといふ屢々言はれる言葉の意味も根本のところからお解りだらうと思ふ。言葉は毎日太陽に照らされ、風に吹かれ、生活に揉まれ、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com